まほろん
福島県文化財センター白河館

第２回館長講演会

東日本を先導した福島の弥生時代研究

―1980 年頃までの調査・研究成果を中心に―

公益財団法人福島県文化振興財団副理事長
兼　福島県文化財センター白河館長
石川　日出志

一ノ堰Ｂ遺跡（会津若松市）出土弥生土器

2022 年９月２５日（日）

福島県文化財センター白河館

石川日出志館長のプロフィール

出　身　　昭和 29(1954)年生まれ　67 才
新潟県出身

略　歴　　明治大学文学部考古学科卒業
同大学大学院文学研究科博士課程中退　文学修士
現在、明治大学文学部教授
福島県文化財センター白河館館長、公益財団法人福島県文化振興財団副理事長を兼務

主な著作　『農耕社会の成立』岩波新書 2010 年
『「弥生時代」の発見 弥生町遺跡』新泉社 2008 年
『考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器Ⅰ』(共編) 小学館 2003 年

能登遺跡（会津坂下町）出土弥生土器

東日本を先導した福島の弥生時代研究

―1980 年頃までの調査・研究成果を中心に―

まほろん館長　石川 日出志

【導入】　前回は，自己紹介を兼ねて，私が考古学の道を歩み始めた頃，福島県内の縄文・弥生時代遺跡の調査・研究に大いに導かれたことをお話ししました．今回は弥生時代に焦点を絞って，私の学生～大学院生時代に親しんだ福島県内の研究や遺跡の調査成果をご紹介します．県内各地の考古学者が懸命に調査・研究を重ね，関東や中部地方とは異なる方法・視点による優れた研究が進められました。それは，私を導いただけでなく，東日本の弥生時代研究を牽引するものでしたし，現在の調査研究の基盤ともなっています。

０．導入：　遺跡調査の仕組み＆考古学の歩みと福島県

（１）遺跡調査の仕組み

・現在，遺跡の発掘は，文化財保護法に基づいて行われる（1950 年公布・施行，のち改訂）．この法律は前年に起きた法隆寺金堂火災を契機として戦後の議員立法第１号(山本有三ら）として定められた．遺跡発掘にまつわる法制度が整う．届け出制.

・1948 年に全国学会＜日本考古学協会＞が設立されたことも関連する．遺跡調査の仕組みを検討して同法に反映.

・遺跡発掘の様子は，高度経済成長期以前／以後で大きく異なる.

（２）1960 年代後半以前：個人（＋アルファ）レベルの調査

・小規模の調査や，発掘によらない考古学研究が蓄積され，それが今日の考古学の枠組みの基本を築いた.

・県社会教育課の梅宮茂氏が県内調査を指導.

（３）1970 年度頃から全国で自治体（県市町村）に埋蔵文化財調査部門が徐々に設けられる.

・1960 年代後半から全国で開発に伴う発掘が急増したことへの対応.

１．弥生時代の本格的探究の始まり：白河市天王山遺跡の調査・研究（本日は簡略紹介のみ）

（１）1950 年：藤田定市氏調査，同年 2 次調査は梅宮氏支援.【図１】

（２）「天王山式土器」の提唱（伊東信雄）とその不思議　【図２】

・北方系？　　・広範な出土例（早くも 1952 年に石川県内で確認される）

・編年（弥生時代のいつなのか？）が変転する.

２．優れた弥生土器の編年研究

（１）戦前 1930 年代に，山内清男氏が東北を含む縄文土器型式編年を構築.【図３】

＊土器型式の編年は，遺物・遺構・遺跡の年代を定めるもっとも重要な基礎研究.

・しかし弥生土器は資料が乏しく編年の整備がなかなか進まなかった.

（２）1950～1960 年代に中村五郎氏が，福島県内の弥生土器編年を整備し，これを基準として北陸・関東から北海道まで東日本一帯の編年体系を築く.　【図４】

・弥生時代の土器編年研究の多くが西日本から追うのとは異なって，東北で縄文土器からその後を追う独自の方法を採用した（山内清男方式）.

・弥生時代東日本の広域編年基準として優れており，石川らはこれに多くを学んだ.

３．東日本でもっとも充実した石庖丁資料群　【図５】

（１）石庖丁とは何か？　（石の庖丁ではなく，穂摘み具）

（２）竹島國基氏が，天神沢遺跡など相双地域の遺跡群を（発掘ではなく）踏査して収集した石庖丁群は，今なお東日本でもっとも充実した資料として注目される．

・美しい相馬古生層産粘板岩を用いて石庖丁・磨製石斧を製作し，福島・宮城両県内のみならず岩手県南部まで供給された．東日本でも石庖丁が広域流通したことが分かる唯一例．

４．不思議な墓制・再葬墓：　東日本でもっとも良好な状態で発見！

（１）再葬墓とは？

・前半期の弥生土器がほぼ完形でまとまって発見されることが古くから知られていた．1964年の千葉県天神前遺跡で壺の中から成人骨が発見されて，いったん土葬などして骨化したのち壺に収めた「再葬墓」と判明した．

・弥生時代前期～中期前葉で，本格的な稲作は始まっていない段階．

（２）棚倉町崖ノ上遺跡　【図６】

・明治 21 年発見, 3 個体が現存. 再葬墓遺跡が発見されて資料が現存するもっとも古い事例.

・棚倉藩最後の藩主・阿部正功（まさこと）が記録を残す．

（３）会津若松市南御山遺跡　【図７】

・明大の杉原荘介が 1949・1966 年に調査．再葬墓としては壺 1 個体のみ．

（４）1960～80 年代に相次いだ福島県内の見事な再葬墓遺跡の調査

①．石川町鳥内遺跡　【図８】

・1970 年の 3 回にわたる発掘調査で，良好な状態の再葬墓群を検出した．

・東海や北関東から持ち込まれた土器が特に注目される．

②．会津若松市墓料遺跡

・1974 年発掘調査＝東日本でもっとも良好な状態の再葬墓群を検出した．

・土器群がじつに多彩な点が注目される．西日本から搬入された弥生時代前期土器も．

・1980・81 年にも調査・範囲確認．近年も調査されている．

③．伊達市（旧霊山町）根古屋遺跡　【図９】

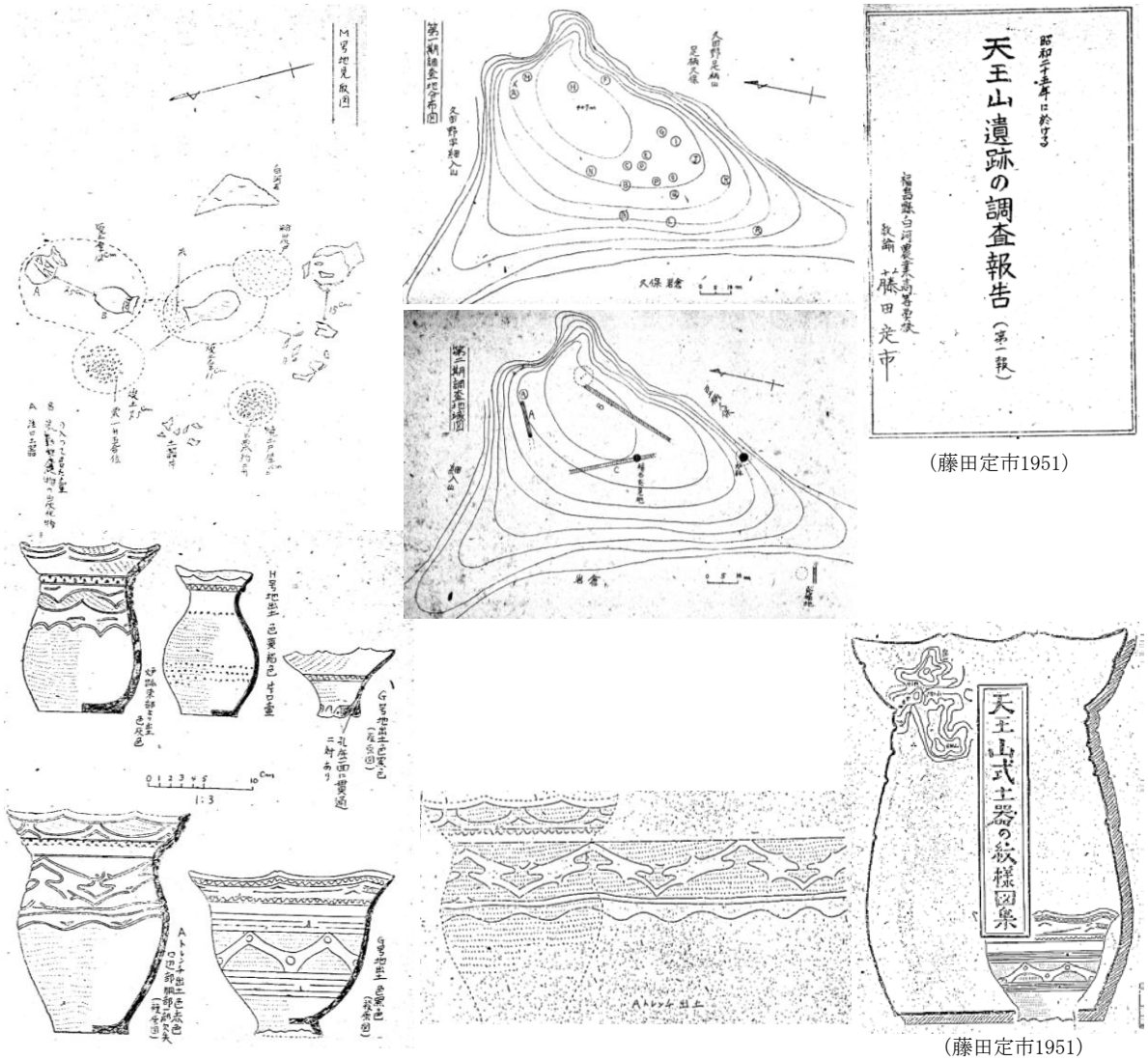
・1982 年に発掘調査．良好な状態の再葬墓群と多量の焼けた人骨が検出されて注目された．

・焼けた人骨に，抜歯痕と再葬時の解体痕

＊弥生時代の再葬墓がどのような墓制なのか，まだ不明な点が多い．その実態は，福島県内の遺跡を詳細に調査しなければ理解することは困難．

まとめ

今回は，戦後直後から 1980 年頃までの福島県内の弥生時代に関する考古学研究や発掘調査の成果を紹介しました．いずれも，現在の発掘調査の仕組みとは比べものにならないほど厳しい条件下での調査・研究でした．しかし，そんな中でも先達の方々が，大変なご苦労をされながら，東日本の弥生時代研究を牽引したというべき成果を挙げました。調査で得られた資料・データを入念・詳細に吟味して，今日の調査研究の基礎を構築されたことに，大いなる敬意を払いたいと思います．

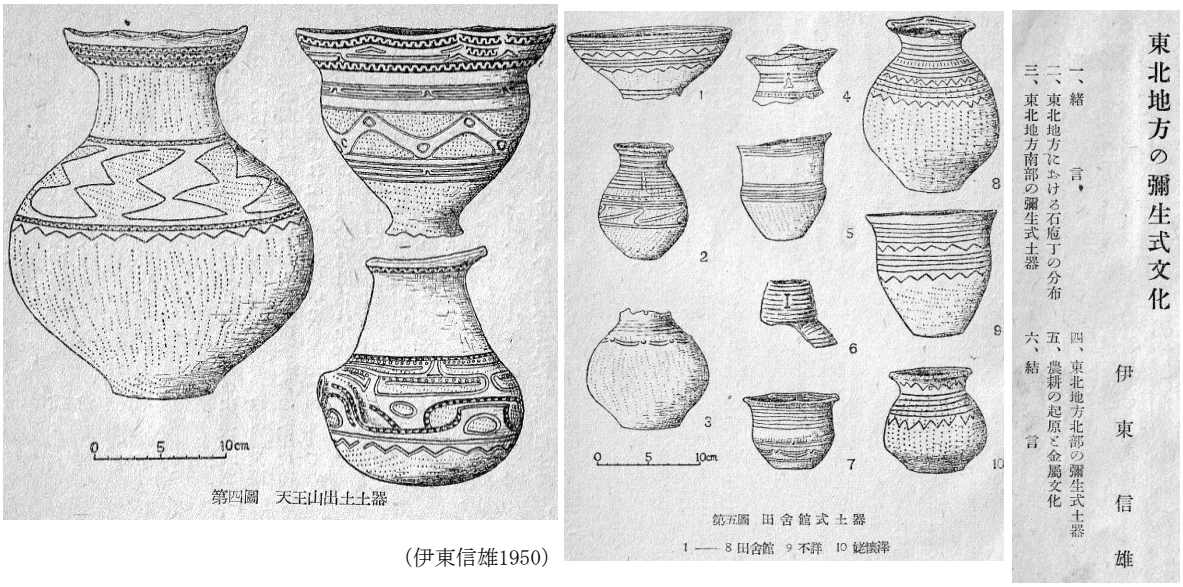


（藤田定市1951）

（藤田定市1951）

図１ 1950年に白河市天王山遺跡を発掘した藤田定市氏による報告書

正確な遺跡測量図と土器実測図・展開図を孔版刷ながらみごとに表現した.



（伊東信雄1950）

図２　1950年，藤田氏報告の前に「天王山式土器」を提唱した伊東信雄氏

縄紋土器型式の大別

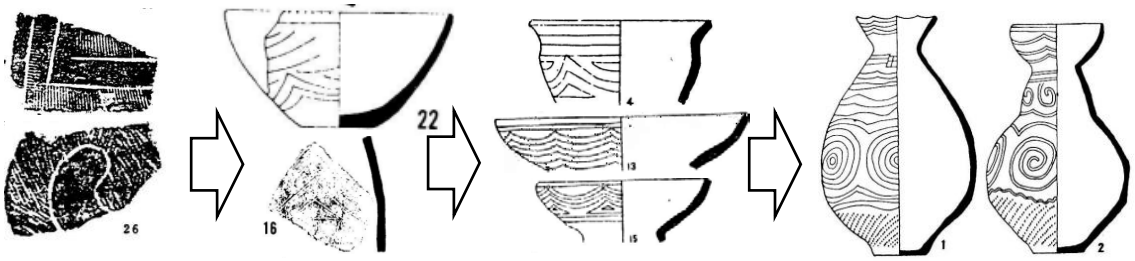
	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	榎木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根？× (+)	ひじ山 貉畑		黒島×	轟場ヶ谷×
前期	石川野× (+)	圓筒土器下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 〃 2a,b 〃 3–5 〃 6	蓮田式{花積下 關山 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 新場	鉢ノ木×	國府北白川 1 大歳山	濃ノ森 里木 1	轟？
中期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8a,b 〃 9,10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃（新）	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ヶ岡式{(+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮瀧× 日下×竹ノ内× 宮瀧×	津雲下層	御領

註記 1. この表は假製のものであつて，後日訂正増補する筈です。
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×)印は型式名でなく，他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

（山内清男1937）

新地町小川貝塚
（1923年発掘：山内清男1969）

図３　1920-30年代に山内清男氏が関東・東北で縄文土器型式の編年を構築



南御山２式 線間に縄文充填 →→ 二ツ釜式 縄文なくなる →→ 川原町口式 線間隔狭まる →→ 天ケ式 もっと狭くなる

（中村五郎1955・58・59・60・61より作成）

第１表　東北地方弥生式土器編年表

南関東	北関東西部	北関東東部	石城	会津	中通り	相馬	宮城及岩手南部	青森・秋田	北海道南部
	四十坂	女方の一部		上野尻	御代田	成田	福浦島下層	砂澤	
三ケ木？	仙波			今和泉	枇杷澤				
							寺下囲？		本
平澤	出流原	野澤 I		南御山の一部	棚倉				輪
		野澤 II							西
飛鳥山	竜見町		＋	南御山 II	柏山の一部	浪江上ノ原の一部	桝形囲南小泉・西台畑		上
				二ツ釜	下高野	原山	円田	宇津台の一部	層
宮ノ台		足洗							式
	用土？ ＋		玉山	川原町口，中開津三百刈	柏山の一部	櫻井 I	清水，南小泉の一部（旧称十三塚式）	田舎館（新）？	
					天ケ	櫻井 II		志藤澤	
久ケ原		東中根	＋	中開津他	天王山	浪江上ノ原の一部	常盤の一部，崎山囲の一部	小坂地方諸遺跡	江
及びそれ									
以降諸型式	＋	長岡	＋	勝常村南	踏瀬大山		＋		
	樽	十王台	長子・郡		大高平				別
	＋	＋		細田		＋			
	＋	＋	＋	上舞台他	中島	＋	塩釜		式

註記　1．この表は仮製のもので，後日訂正増補される部分がある
2．＋印は相当する式があるが，型式名の付いていないもの
3．本表中，当該期の資料を出土した遺跡名も含んでいる

（中村五郎1976再録）

図４　中村五郎氏が読み解いた土器の変遷と1967年編年表

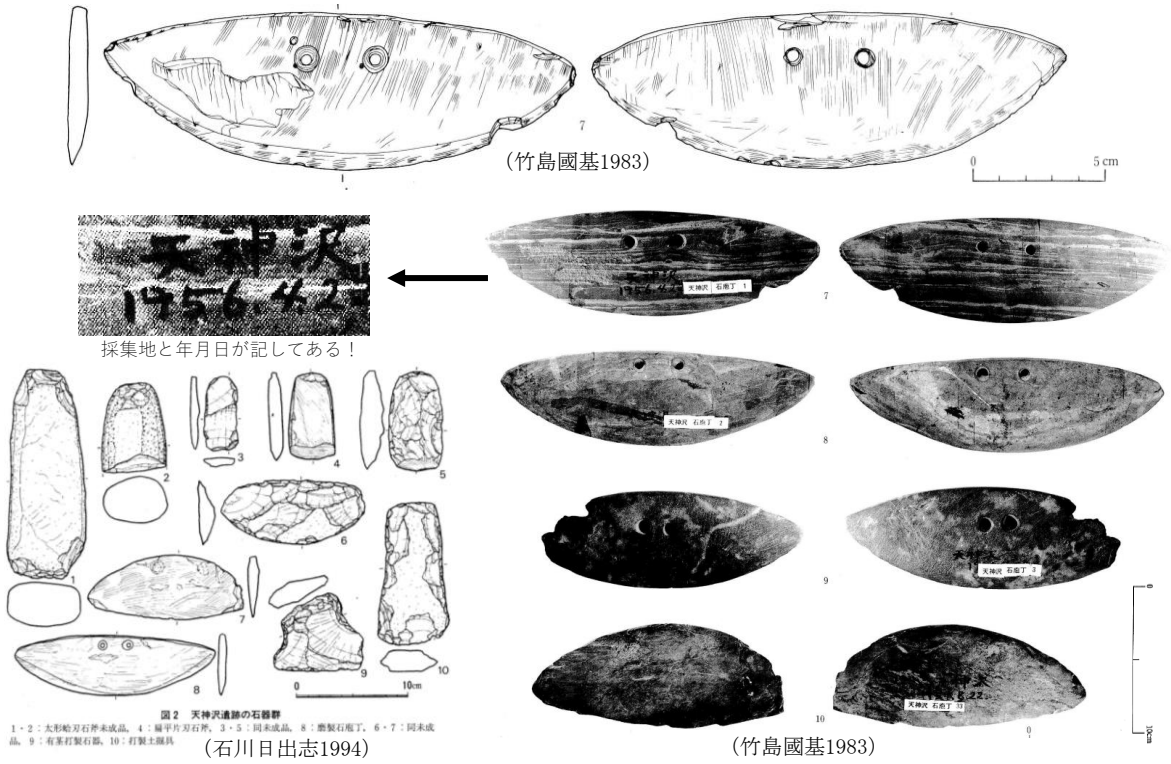


図５　竹島國基氏が収集した南相馬市天神沢遺跡の石庖丁など

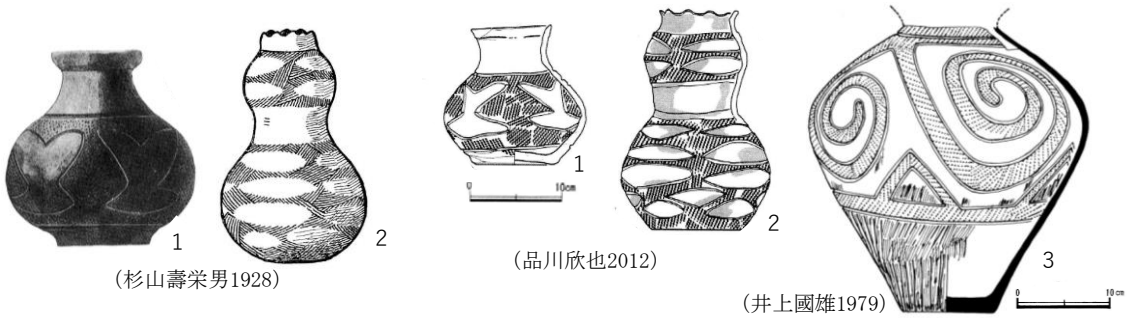


図６　明治21年（1888）に棚倉町崖ノ上遺跡で掘り出された3個体の弥生土器

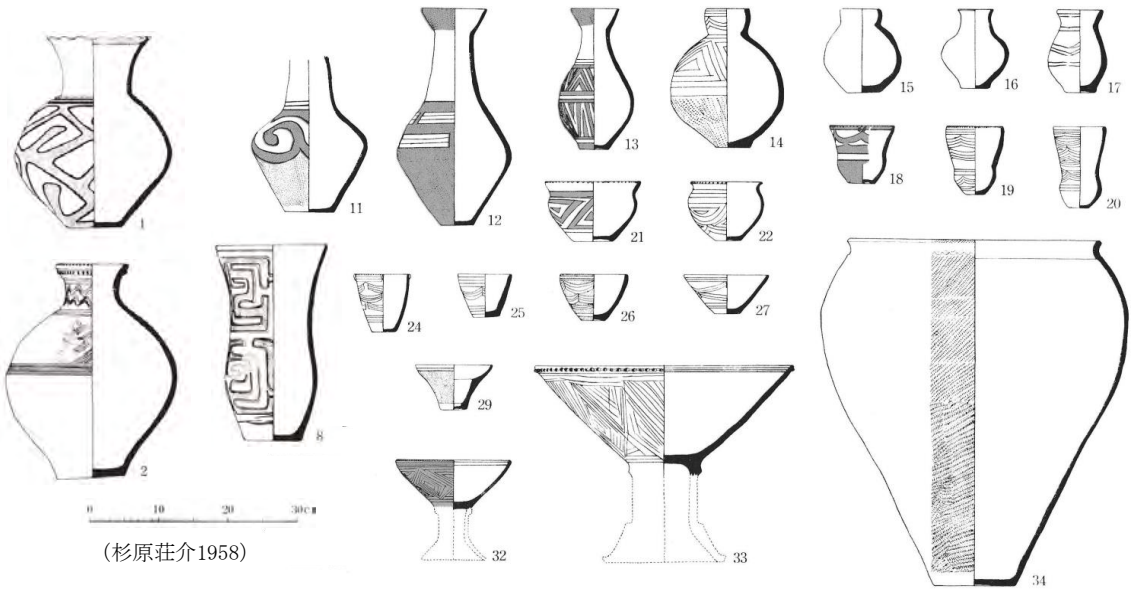


図７　会津若松市南御山遺跡の地元採集資料・杉原荘介調査資料

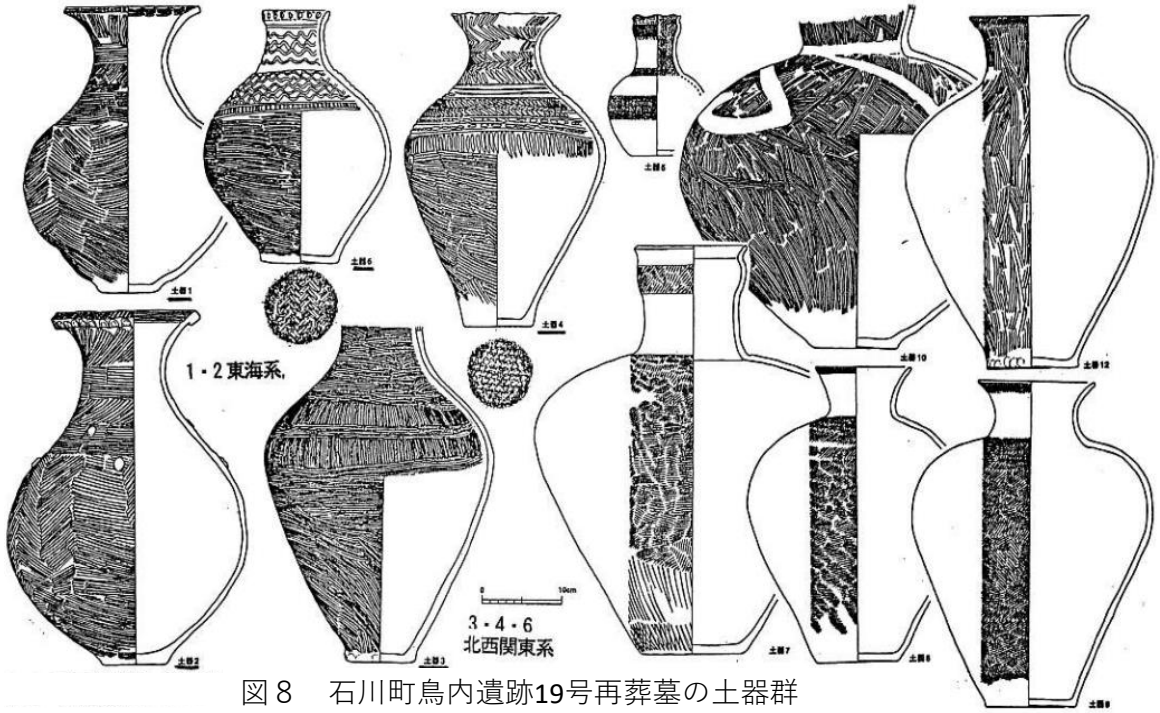
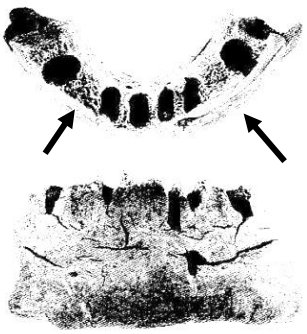
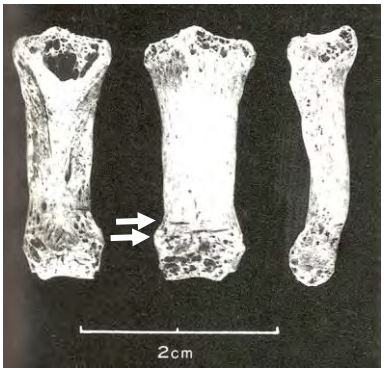


図８　石川町鳥内遺跡19号再葬墓の土器群



抜歯の風習



再葬時の解体痕

図９　伊達市根古屋遺跡の再葬墓　土器が密集し，土器外に焼けた人骨も